

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 13 日現在

機関番号：27101

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23720137

研究課題名(和文) 英米圏における文化研究の布置状況に関する実証研究

研究課題名(英文) Research in the Constellation of Anglo-American Cultural Studies

研究代表者

高山 智樹 (TAKAYAMA, Tomoki)

北九州市立大学・文学部・准教授

研究者番号：70588433

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円、(間接経費) 810,000円

研究成果の概要(和文)：20世紀イギリスに存在した文化研究、またそれと密接な関連を持って展開していた文化運動の潮流が、現在置かれている状況を明らかにするために、20世紀イギリスを代表する文化研究者であるレイモンド・ウィリアムズと、その後継者の一人であるテリー・イーグルトンとの関係を中心に、英米圏の文化研究の布置状況を解明することを目指した本研究では、新自由主義の進展に伴って困難な状況に追い込まれた文化研究の様相を明らかにすると同時に、そうした状況を打破するための活動を行っているヒラリー・ウェインライトの活動を、イギリス文化研究の良質な部分を受け継ぐ存在として位置づけ直すことに成功した。

研究成果の概要(英文)：This research which meant to describe the present situation into which the tradition of 20th century cultural studies and cultural movements in Britain had been brought, started focusing on the relationship between, Raymond Williams and Terry Eagleton, both well-known cultural theorists. Throughout this research, the impact of Neoliberalism on both cultural studies and cultural movement is explained and the way which could break through, practically and theoretically, the stalemate into which both cultural studies and cultural movement, had been strayed is sought.

Although, Terry Eagleton, one of the two could-be central figures of this study, has been proved not to be the suitable person for those purposes, this research had found Hilary Wainwright, one of most aggressive activists in Britain, playing central role as a inheritor and defender of British cultural studies and cultural movements.

研究分野：文学

科研費の分科・細目：英文・英語圏文学

キーワード：レイモンド・ウィリアムズ 文化研究 ヒラリー・ウェインライト 文化運動 ニューレフト

1. 研究開始当初の背景

(1) イギリスの文化研究は、20世紀初頭に誕生した後、20世紀を通じて独自の発展を遂げており、数多くの著名な研究者・知識人を輩出しながら、イギリス国外にも大きな影響力を及ぼしているものの、その研究成果の本格的な検討はいまだなされていない状況である。

(2) 上述したイギリスの文化研究は、やはり20世紀を通じて発展してきた様々な形態の文化運動と密接な関連を持っているが、そのような、文化研究と文化運動との相互連関についても、やはり満足な研究はなされていない。

2. 研究の目的

(1) 以上のような状況を受け、本研究は、20世紀イギリスを代表する文化研究者の一人であるレイモンド・ウィリアムズを研究の中心に据え、彼が国内外の研究者と取り結んだ人的なネットワークの解明を行いつつ、彼がイギリスの文化研究に対して行った貢献を理論的に把握し、現在の文化研究の状況を、英米圏を中心に明らかにしようとするのを第一の目的としていた。

(2) また、レイモンド・ウィリアムズは、成人教育運動やニューレフト運動など、多様な文化運動にも積極的に関わっていた人物であり、彼自身の研究が、文化研究と文化運動の相互連関についての、1つの貴重な事例となっている。従って、本研究は、単にウィリアムズのアカデミックな研究成果とその影響のみを検討するのではなく、ウィリアムズが文化運動を通じて築き上げたネットワークにも目を向けることで、文化運動との関連でみた文化研究の布置状況を解明することをも、目的としていた。

(3) 以上のような観点から、本研究は、レイモンド・ウィリアムズの実質的な後継者と目されており、またニューレフト運動などを通じてウィリアムズとの文化運動における共同作業にも携わってきた、現代イギリスを代表する文学・文化研究者であるテリー・イーグルトンを、ウィリアムズと並ぶ中心的な研究対象として選び、両者の関係を軸にすることで、上述(1)(2)の目的を達成することができると考えた。

3. 研究の方法

(1) 本研究の研究方法は、大まかに二種類に分けることができる。一つは、イギリスにおける調査研究であり、そこでは、イギリス国内のアーカイヴに所蔵されている、ウィリアムズの書簡などの私的文書を閲覧・解読する一方で、直接・間接にウィリアムズに知見がある研究者・知識人・活動家にインタビューを行うことをも通じて、ウィリアムズの交友関係を明らかにすることが目指された。

(2) また(1)を補足するものとして、ウィリアムズやイーグルトンと同時代を生き

た研究者・知識人・活動家などの回想録や自伝、伝記などの公刊されている文書資料を利用して、具体的な交友関係のみならず、そうした人間関係が取り結ばれた歴史的背景なども解明する作業も行われた。

(3) 既に「2. 研究の目的」でも述べたように、本研究は単に人的ネットワークを描き出すだけではなく、それと同時に、イギリスにおける文化研究の理論的な成果をも解明し、また文化研究と文化運動との相互連関の様相をも明らかにすることを目的としていた。そのため、現代の英米圏において文化研究を行っている主要な研究者・知識人の著作の理論的検討を行うことも、重要な作業であった。これが(1)と並ぶ、二つ目の重要な研究方法であった。

4. 研究成果

(1) 様々な私的文書の解読を通じて明らかになったことの一つは、従来の研究では、1960年代前半に起こったニューレフト運動の分裂以降、ウィリアムズを含む旧い世代の知識人と、ペリー・アンダーソンに代表されるような新しい世代の知識人との間に存在するとされていた断裂が、さほど大きなものではなかったということである。とりわけウェールズのスウォンジー大学内にあるリチャード・バートン・アーカイヴに収められたウィリアムズの書簡からは、ウィリアムズのみならず、ニューレフト運動に参加していた様々な世代の様々な知識人が、個人的な交友を続けていた様子を見て取ることができた。

(2) 上述したことは、また公刊されている文書資料でも跡づけることができた。とりわけ、イギリスのヒラリー・ウェインライトやシーラ・ローバタム、カナダのエレン・メイクスィンス・ウッドやジョン・ペラミー・フォスターといった、世代的にはニューレフト運動の新しい世代に属しながら、思想的・心情的には旧いニューレフト世代に強い共感を持っていた一群の知識人の著作などからは、そうした人々が、ウィリアムズに代表されるような文化研究の遺産を積極的に受け継いだ形で研究を行っていることと同時に、世代を越えた共同作業に携わっていたことが明らかとなった。

(3) また、(2)の作業を行うなかで次第に明らかになったこととして、現代、とりわけ1990年代以降の文化研究に対する社会的な圧力の高まりが挙げられる。より具体的に言えば、1980年代以降にイギリスで本格化した新自由主義的な社会改革は、制度の面でも、また思想の面でも学問の世界に強い影響を与えており、その結果として、文化研究はかなりの程度の規模縮小を余儀なくされているのである。このことについては、2012年8月に一橋大学で開催された、一橋大学言語社会研究科プロジェクト「マルクス主義批評の現在—Bridging Social Left and Cultural Left」講演会で研究代表者が行った講演「新

自由主義下における文化社会学の行方」でも報告している。

(4)さらに、新自由主義的社会改革は、学問のみならず、社会運動にも大きな影響を及ぼしている。一方では、新自由主義的なグローバル化に対する世界規模での反対運動が起こっているが、他方で、国内の個々の運動は後退を迫られており、とりわけイギリスでは、従来行われてきた広範囲に渡るような文化運動が成立しにくい状況が生まれている。また、その結果として、本研究の考察対象であるところの、文化研究と文化運動との間の相互関係も、極めて弱体化しているのである。以上のことは、1980年代以降のイギリスの文化研究・文化運動の歴史をめぐる文献研究から読み取ることができると同時に、本研究期間内に行われた、イギリスにおけるウィリアムズ研究者らに対するインタビュー、とりわけ、2013年9月に行われたイギリスのブライトン大学で行われたコンファレンス、“Raymond Williams, John Logie Baird: Television, Technology and Cultural Form”における、研究者や活動家との交流においても、確認できたことである。

(5)(4)で述べたような、文化運動の断片化、さらには知的活動との乖離といった状況は、新自由主義下における文化という、今日の文化研究の主要なテーマの、一つの具体例ともなっている。そうした研究成果をふまえて、新自由主義と文化との関係についての考察を展開したものとして、本研究期間内に発表した論文「私たちはどのような『文化』を生きているのか」がある。そこでは、文化研究がその視野を狭めてきた(それ自体が新自由主義の影響とも言える)結果として、イギリスの文化研究が持っていたような射程を失いかけていることが指摘され、同時に文化研究がより広い視野を持った社会的実践と結びつくことの重要性が強調されている。

(6)他方、以上に述べてきたような文化研究と文化運動をめぐる状況総体において、テリー・イーグルトンの研究はさほどの重要性を持たないことも明らかになっていった。一つには、本研究期間内に、彼の主たる研究関心が、宗教という、それまでの文化研究の潮流からは外れる方向に向かっていったことがあり、また一つには、(2)で挙げたような知識人とイーグルトンとの間に交流関係は存在したものの、運動全体から見た時には、イーグルトンの方がより限定的な役割しか果たしていないことが明らかになったということもある。従って本研究は、中心となる研究対象を変更することを余儀なくされた。

(7)以上のことから、本研究は当初の目的を果たすために、既に名前を挙げた、ヒラリー・ウェインライトを、レイモンド・ウィリアムズと並ぶ、研究の中心軸とすることとした。彼女は、(3)で述べたような、世界規模での社会運動のネットワークと、国内での個別的な運動とを結びつけるような活動を

行う熱心な社会運動家であると同時に、ウィリアムズを中心とするような、文化研究の遺産を受け継ぎ、文化をめぐる権力関係についての理論的把握をも行おうとしている研究者でもある。言い換えれば、彼女は文化研究が現在置かれている困難な状況に対抗する文化運動を組織する活動と、そうした状況を把握することを可能にするような文化研究を発展させるという活動とを統合しようとしているのである。彼女を対象とした研究はいまだ殆ど存在していないが、国内外で活躍する彼女の研究・運動の成果を、以上のような文脈で位置づけ直すことは、本研究の目的に適うだけではなく、社会運動論などにも大きな寄与を果たすはずである。なお、これらについては、2014年10月に公刊予定の論文「ウェインライトと二つのニューレフト」で扱っており、この論文が、本研究の最終的な成果の一つとなる。

(8)なお、(4)で触れたコンファレンスでは、現代のイギリスにおいて、数少ない活発な活動を行っている文化運動として、メディアを活用したコミュニティ運動などが存在していること、またそうした運動に従事する活動家のなかに、少なからずウィリアムズなどの文化研究に強い関心が存在することが明らかになったが、この点についての本格的な解明は、本研究代表者の今後の研究に委ねられることになる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

高山智樹「ウェインライトと2つのニューレフト」『北九州市立大学文学部紀要』(査読無)84巻、2014年、掲載決定

高山智樹「私たちはどのような『文化』を生きているのか」『社会文化研究』(査読無)15巻、2013年、29-48頁

〔学会発表〕(計1件)

高山智樹「私たちはどのような『文化』を生きているのか」社会文化学会、2011年12月23日、東洋大学

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等 なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

高山 智樹 (TAKAYAMA Tomoki)
北九州市立大学・文学部比較文化学科・准
教授
研究者番号：70588433

(2) 研究分担者 なし
()

研究者番号：

(3) 連携研究者 なし
()

研究者番号：